

1 4	岡 崎	下山小学校	イワグチ アイミ
			氏名 岩口 愛実
分科会番号	0 6	分科会名	生活科教育

下山につながる「ひと・もの・こと」と関わる学習を通して、地域に支えられている自分に気づき、
地域の「ひと」と主体的に関わろうとする児童の育成
～1・2年生しもやまふさと学習「しもやますてきみっけ隊！」の実践を通して～

1 研究概要

(1) 主題設定の理由

本校の本学級には、1年生3名、2年生1名の計4名の児童が在籍している。その中の抽出児A（2年生）は、下山につながる「ひと・もの・こと」への興味・関心が高く、探検で見つけた生き物の生態を調べたり、気になったことを自ら確かめに行ったりすることができる。また、学校行事の中でも田んぼ活動に強い関心をもち、「田んぼが大変なのはぼくたちではできないから。でも、地域の人がいるからできるんだよ。」と話していた。一方で、日常の様子を見ると知りたいことがあっても自分から尋ねることにためらいがあり、自分の思いを相手に伝えることにも苦手意識をもっている。生活科の学習においても、「自分から話すことはできない」「やりたくない」と話し、学習に対して消極的になる姿が見られる。地域は身近な存在だが、自分から関わる時間が少なく、下山のよさや地域の方と自分とのつながりを実感することは少ない。そこで、生活科の学習や体験活動を、下山につながる「ひと・もの・こと」と関連づけることで、児童が地域に支えられている自分に気づき、下山をより身近に感じられるようにしたい。さらに、その学びをもとに地域とのつながりを実感し、地域の一員として主体的にひとに関わろうとする姿を育てたいと考え、本研究主題を設定した。

(2) 目指す子供像

- ①地域に支えられている自分に気づき、下山を身近に感じることができる児童。
- ②地域への愛着を深め、支えてくれる地域の「ひと」と主体的に関わろうとすることができる児童。

(3) 研究の仮説と手だて

①研究の仮説

【仮説Ⅰ】下山の「ひと・もの・こと」と関わる体験活動を取り入れることで、児童は地域に支えられている自分に気づき、下山を身近に感じることができるだろう。

【仮説Ⅱ】見つけた下山のすてきを伝えたり関わり方を考えたりする活動を行えば、児童は地域への愛着を深め、主体的に支えてくれる地域の「ひと」と主体的に関わろうとすることができるだろう。

②手だて

仮説Ⅰについての手だて

手だてa 下山につながる「ひと・もの・こと」に関わる体験活動の設定

- ・地域の人や下山にある場所・ものに、実際に見たり触れたり関わったりする体験活動を設定する。
- ・立場や年齢の異なる地域の人との挨拶や質問などのやり取りを通して、自分と地域とのつながりを実感できる場を設ける。
- ・体験で生まれた「気になる」「知りたい」という思いを大切にし、地域に関わる活動を繰り返し行う。

手だてb 「ひと・もの・こと」のつながりが見える整理・共有の工夫

- ・体験活動を振り返り、①誰が②何が③どのようにつながっているかという視点で振り返る場を設ける。
- ・フィッシュボーン図を活用して、聞いた情報を整理できるようにする。
- ・友達と気づきを伝え合うことで、自分では気付かない地域のよさやつながりに目を向けられるようにする。

仮説Ⅱについての手だて

手だてc 見つけた下山のすてきを伝え合い、思いを広げる交流活動の充実

- ・タブレットやワークシートを活用し、見つけた下山のすてきや地域の人から聞いたことを整理してまとめる。
- ・下山のすてきを写真やキーワード、付箋などを用いて可視化しながら共有し、伝えたい内容を整理・構成できるようにする。

- ・友達と伝え合う中で互いの気付きや考えに触れ、地域のよさへの思いや愛着を広げたり深めたりできるようにする。

手だてd 地域との関わり方を考え、実践へつなげる活動の設定

- ・見つけた下山のすてきや地域の人への思いをもとに、自分にできる関わり方を考える場を設ける。
- ・感謝を伝える、地域のよさを紹介するなど、自分の思いを相手に届ける機会を設定する。
- ・地域と関わる中で得られた気付きを振り返り、これからも主体的に地域と関わろうとする意欲につなげる。

(4) 仮説の検証方法

以下の資料1のように指導計画を立て、児童Aの記録をもとに仮説を検証する。

資料1 「しもやま学習」指導計画

【単元目標】

学年	知識・技能の基礎	思考力・判断力・表現力等の基礎	学びに向かう人間性の基礎
1年	下山の田んぼ活動や地域の人々に親しみをもち、地域には自分たちの学校生活を支えてくれている人があることに気付くことができる。	見たり聞いたりしたことの中から気付いたことや見つけたことを、自分の言葉や絵、写真などで表すことができる。	下山のすてきなところや地域の方への親しみをもち、進んで関わろうとする。
2年	下山の田んぼ活動を支える地域の方の思いや役割について知り、地域の多くの人に支えられていることに気付くことができる。	聞き取りや調査で集めたことを比べたり関連付けたりしながら、下山のすてきや地域の方の思いを捉え、分かりやすくまとめて伝えることができる。	下山のよさや地域の方への感謝の気持ちをもち、自分にできることを考え、進んで行動しようとする。

1・2年生ふるさとしもやま学習「しもやますてきみつけ隊！」(45時間完了)

下山小学校の行事は何があるの(2)

- ・田んぼ活動があるよ。・しろかきもあるのを知ってるよ。・今年は田んぼ活動に目を向けたいな。
- ・運動会を観に行ったことありよ。・一番大変なのは田んぼだよ。
- ・どんな行事があるのか楽しみだな。・あんまり関わらない田んぼについて知りたいな。

一番大変田んぼ活動はどうやってやっているのかな(3)

- ・写真を見ると友達と一緒にやってるよ。・先生やお家の人と一緒にやってくれるよ。
- ・地域の方もたくさんいるよ。・地域の方だと高木田さんだけ知っているよ。
- ・お兄さん、お姉さんが一生懸命田んぼをやっているのは聞いたことあるよ。・前の先生に聞きたいな。
- ・誰が田んぼ活動に関わってくれているのか分からないな。アンケートを作りたい。

どうして地域の方は手伝ってくれているのかな(7)

- ・なんで下山小のためにいろいろと手伝ってくれるのかな。・質問をして、聞きたいな。
- ・一緒に朝歩いていって高木田さんが田んぼのことを教えてくれるよ。
- ・先生たちが地域の方がお願いをしているからかな。

田んぼに関わる地域の方に会ってみたい(10)

- ・好きな食べ物や好きな虫などを聞きたいな。
- ・いつから下山の田んぼは始まったのかな。
- ・話を聞いたらリモートや直接お話しして地域の方のことをもっと知りたいな。
- ・話を聞いていると下山のためにいろいろな思いをもって関わってくれているのがよく分かったよ。
- ・成瀬さんは町おこしのために渡邊さんと協力してラジオをしているんだね。
- ・11月に稲刈りで地域の方に会うから自分から話しかけたいな。
- ・小久保さんは最初は柴田酒造で働いていて、そこから田んぼに関わるようになったんだね。
- ・平松先生や康平先生もいろいろな思いをもって田んぼに関わっていたんだね。

地域の方の好きな場所にも行きたい(9)

- ・平松先生がおすすめしていた蔵カフェに行こう。
- ・山桜もおすすめと言っていたから山桜の下でお弁当を食べたいな。
- ・高木田さんがおすすめの場所を教えてくれたからみんなで学区探検をしたいな。
- ・小久保さんがおすすめしていた阿知波花火店にも行きたい。
- ・変わった花火があることを知ったよ。
- ・小林さんのおすすめはどこかな。
- ・地域には素敵な「ひと」も「場所」もたくさんあるんだね。
- ・ぼくの知らなかった場所があったよ。行ってみたい。
- ・渡邊さんのおすすめはラジオと聞いたよ。確か、成瀬さんがラジオをやっていたから成瀬さんに会いたいな。
- ・下山はいろいろな人やものがつながっているんだね。

下山はすてきな場所と人がいっぱい！「田んぼ図鑑」をつくろう(8)

- ・「田んぼ図鑑」を作ればこれからの田んぼ活動で地域の方の名前を呼べるね。
- ・写真とインタビューをしたことを入れたら図鑑になるね。
- ・インタビューの時に聞いた地域の方のおすすめの場所の写真を入れたら下山のすてきな場所も紹介できるね。
- ・図鑑だけではなくカードも作ったらどのくらいの地域の方がいるのか知ることができるね。
- ・自分たちが撮った写真も入れたらすてきがより伝わると思うよ。
- ・図鑑を作ったからより感謝の気持ちをもって地域の方と関わることができるね。
- ・ひらがなを習ったから自分で地域の方の名前を書きたいな。
- ・田んぼに関わってくれる地域の方だけではなく、ぼくたちが見つけた下山のすてきも書いてみんなに伝えたいな。

- ・田んぼ活動にはたくさんの地域の方がいることを全校や先生にも知ってもらいたいな。
- ・今まで下山に関わってくれている地域の方に感謝の気持ちを伝えたい。
- ・見つけた下山学区のすてきも伝えたいな。
- ・今度は田んぼ活動だけではなく、下山学区のすてきを守っていくために自分たちのできることを考えたいな。

地域の方に感謝を伝えたい(6)

- 調べたことをまとめて、自分自身ができることを考える。
- ・ふるさと学習発表会に田んぼ活動を手伝ってくれている地域の方を招待したいな。
- ・地域の方が手伝ってくれているから田んぼ活動ができることを伝えたいな。
- ・インタビューしたことを入れながらどうしたら感謝の気持ちが伝わるのか発表の仕方を工夫したいね。
- ・今度はすてきな地域の方がいる下山学区がすてきな場所を伝えられる方法を一緒に考えたいな。
- ・ラジオだけではなく、市役所に行けたらもっと下山の魅力をいろいろな人にも知ってもらいたいな。

ずっと下山をすてきな地域の方と一緒に場所を守っていききたいな。

2 実践

(1) 下山につながる「ひと・もの・こと」に関わる体験活動の設定（仮説Ⅰの手だてa）

児童Aは、人に話しかけることに強い抵抗感があり、初対面の相手との関わりでは緊張が高まる傾向があった。そこで、児童Aの興味・関心を出発点としながら、関わる相手や活動内容を段階的に設定することで、「ひと」と関わることへの抵抗感を軽減し、主体的な関わりを促すことをねらいとした。

学習初期の4月下旬に、前年度の1年間の行事について振り返る機会を設けた。児童Aに「一番大変だった行事は何だったかな」と問いかけると、「田んぼ活動が大変だったよ」と話した。さらに、「田んぼ活動はどのように行っていたのかな」と尋ねると、「下山小学校のみんなだけではできないけど、地域の人が手伝ってくれるからできるんだよ」と答えた。この発言から、児童Aは田んぼ活動が地域の人々に支えられていることを認識していることが分かった。

その後、1年生の児童から「地域の人って誰がいるの」という問いが出された。しかし、児童Aは具体的に答えることができなかった。そこで、「みんなで田んぼアンケートを作って調べよう」と提案し（資料2）スクールタクトを活用して全校児童や前年度の教職員を対象としたアンケートを作成して実施した（写真①）。アンケート結果を整理すると地域の方だけでなく、多くの人が田んぼ活動に関わっていることが分かった。児童たちは、集まった名前を付箋に書き出しながら、「電話で話を聞いてみたい」「学区探検で会いに行きたい」などの思いをもつようになった。

「誰に話を聞いてみたいかな」と問いかけると、児童Aは「前年度の先生」「高木田さん」「小久保さんに聞いてみたい」と提案した（資料3）。そこで、児童Aが安心して人と関われるよう、まずは学校とのつながりが深い前年度の養護教諭へのインタビューを設定し、その後地域の施設や地域の「ひと」へと関わりを広げていく段階的な体験活動を行った。

6月上旬には、前年度の養護教諭へのインタビューを実施した。児童Aは、事前学習で準備した質問を見ながら、「田んぼ活動で一番楽しかったことは何ですか」「下山の好きな場所はどこですか」など、自分から質問をすることができた。また、「蔵カフェ合もいいところで好きだよ」という話を聞くと、振り返りで「次は一緒に蔵カフェに行きたいです」と書いていた（写真②）。さらに、田んぼ活動に関わる人々の思いや願いについて話を聞く中で、「こんなにたくさんの方が田んぼを手伝ってくれていたんだ」「だから毎年できるんだね」とつぶやく姿が見られた。このことから、児童Aは地域の人々との関わりを通して、自分たちの学校生活や田んぼ活動が多くの人々に支えられていることに気が付き始めたと考えられる。また、当初は「自分から話すことはできない」「やりたくないな」と話していた児童Aであったが、「蔵カフェ」「高木田さん」「小久保さん」とのインタビューを重ねるにつれて、自ら質問を考えたり、話を聞きたい相手を提案したりする姿が見られるようになった（写真③）。

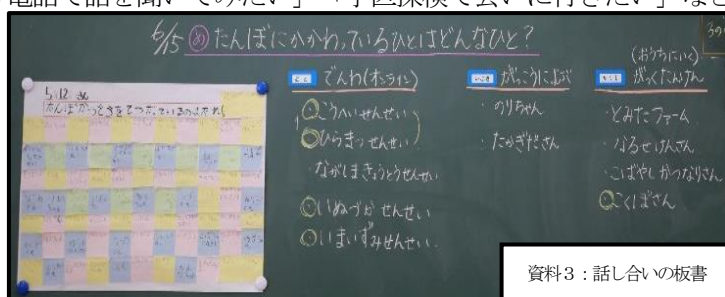
以上のことから、児童Aの興味・関心を出発点とし、学級の友達と関わる活動から地域の方へと関わる相手を段階的に広げる体験活動を設定したことで、安心して交流活動に参加することができたと考える。その結果、自ら質問をしたり、関わりたい相手を提案したりする姿が見られるようになった。また、地域の方々との交流を通して、自分たちの学校生活や田んぼ活動が多くの人々に支えられていることに気付き、下山をより身近な存在として捉えることができるようになった。

- T1 一番大変だった行事は何だったかな。
A1 田んぼ活動が一番大変だったよ。
T2 そうなんだね。田んぼ活動はどのように行っていたのかな。
A2 下山小学校のみんなだけではできないけど、地域の人が手伝ってくれるからできるんだよ。
T3 なるほど。田んぼ活動にいろいろな人が関わっているんだね。
B1 地域の人って誰がいるの。
A3 分からないから、みんなで田んぼアンケートを作って調べよう。

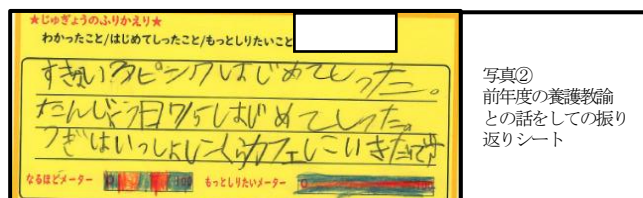
資料2
授業記録抜粋①



写真①
(左) スクールタクトで田んぼアンケートを作成する児童A
(右) 全校に向けてアンケートのお願いをする児童



資料3：話し合いの板書



写真②
前年度の養護教諭
との話をしている振り返りシート



写真③
4人の方と関わり、質問をする児童A

①前年度の養護教諭
②高木田さん
③蔵カフェ
④小久保さん

(2) 「ひと・もの・こと」のつながりが見える整理・共有の工夫 (仮説Ⅰの手だてb)

地域の人や友達と関わる活動の前に、タブレット端末やワークシートを活用して質問したいことや調べたいことを整理する時間を設けた。また、活動中はメモや写真撮影を通して情報を集め、活動後には付箋やフィッシュボーン図を用いて整理・共有する場を設定した。こうした思考整理ツールを活用することで「①誰が」「②何を」「③どのように支えているのか」という視点で地域とのつながりを捉えられるようにした。

①田んぼアンケート

田んぼアンケートの結果を見ながら、「見やすくするためにはどうしたらよいか」と問いかけると、児童Aは「付箋に書くと見やすくなるよ」「色を分けると誰が書いたのか分かりやすくなるね」と提案した(資料4)。そこで、自分で決めた色の付箋を用いて整理する活動を行った(写真④)。整理された情報を見ながら、児童Aは「こんなにたくさんの人が田んぼ活動に関わっているんだね」と話しており、自分たちの身近な活動が多くの人によって支えられていることに目を向けることができた。

②移動販売車ほたる号・前年度の養護教諭・高木田さん・小久保さんとの交流

交流活動の前には、フィッシュボーン図を活用して質問したいことや調べたいことを整理した(写真⑤)。事前に考えを可視化したことで、児童Aは相手に何を聞きたいのかを明確にし、見通しをもって交流活動に取り組むことができた。実際に交流を重ねる中で、「次は蔵カフェ合に行きたい」「小久保さんに会ってもっと話を聞きたい」など、自ら地域の人との関わりを求める発言が見られるようになった。また、集めた情報を整理する中で、児童Aは地域の方々がそれぞれの思いや願いをもちながら下山小学校や田んぼ活動を支えていることに気付き、「こんなにたくさんの人が手伝ってくれていたんだ」「だから毎年田んぼ活動ができるんだね」と話していた。これは、自分たちの学校生活が地域の人々に支えられていることへの気付きが深まった姿であると考えられる。

以上のことから、付箋やフィッシュボーン図を用いて「ひと・もの・こと」のつながりを可視化したことで、児童Aは地域の方々の役割や思いを整理しながら理解することができたと考えられる。また、交流活動への見通しをもつことで不安が軽減され、主体的に関わろうとする姿につながった。さらに、自分たちの生活が地域の方々に支えられていることへの理解が深まり、下山とのつながりを実感することができた。

(3) 見つけた下山のすてきを伝え合い、思いを広げる交流活動の充実 (仮説Ⅱの手だてc)

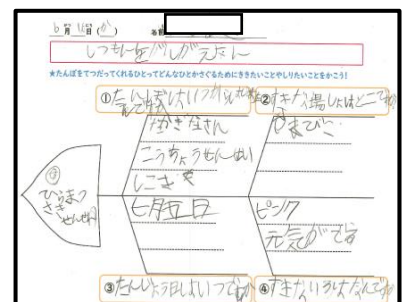
インタビューを通して得た気付きや、地域の方から聞いた話を自分なりに整理し、どんな思いで支えてくれているのか気付いた児童たちが、今度はその気付きを自分の言葉で伝え合う時間をつくった。児童Aは、蔵カフェ合で聞いた話や、高木田さん・小久保さんとの出会いの中で、特に心に残ったことを選び、「たかぎださんが下山のことをたいせつにしていると思いました」(写真⑥)や「地域のひとは、ぼくたちのことを考えてくれている」と素直な気持ちをまとめていた。友達の話聞きながら、「ほたる号の人も、みんなのために来てくれているんだね」や「ぼくが知らなかったすてきがいっぱいある」と友達の視点に触れて「下山のよさ」がさらに広がっていく様子が見られた。また児童Aは、「2学期も田んぼに関わっている地域の人に会ったり場所に行ったりしたい」と話していた。これは、ただまとめるだけでは生まれない、「もっと地域の人と関わりたい」という気持ちが育ってきたと考える(資料5)。

以上のことから、見つけた下山のすてきを友達と伝え合う活動を通して、児童Aは自分の気付きを確かめたり、友達の視点に触れたりしながら、地域への思いを自然に広げていくことができた。また、地域のよさをもっと知りたい、伝えたいという気持ちが高まることもできた。

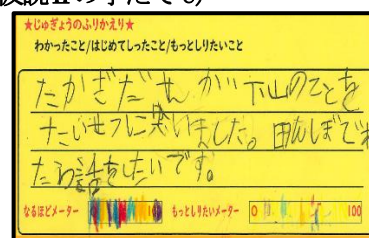
- 資料4：授業記録抜粋②
- T1 田んぼアンケートがたくさん集まったね。
A1 何か見にくいね。
T2 確かに見にくいね。見やすくするためにどうしたらいいかな。
A2 付箋に書くと見やすくなるよ。あと、それぞれの色があると誰が書いたのか分かりやすくなるね。
B1 それいいアイデアだね。やってみよう。



写真④ (左) アンケートをまとめる児童A (右) 付箋の色をまとめる



写真⑤ フィッシュボーン図を活用して書いた質問



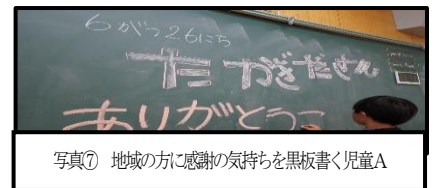
写真⑥ 高木田さんと話をしたの振り返りシート

- (振り返り)
- A1 話を聞いて地域の方は、ぼくたちのことを考えてくれているんだね。
B1 高木田さんの話を聞いたら下山のすてきな場所をたくさん知れたよ。
A2 2学期も田んぼに関わっている地域の人に会ったり、場所に行ったりしたいな。
C1 火花も見たいな。
A3 もっといろいろな場所に行きたいな。

資料5 授業記録抜粋③

(4) 地域との関わり方を考え、実践へつなげる活動の設定 (仮説Ⅱの手だて d)

児童が体験活動や交流活動を通して得た気付きや地域の方への思いをもとに、「自分たちにできることは何か」を考え、実際の行動につなげる場を設定した。地域の方々の思いや願いに触れたことで、児童Aは「ありがとうを伝えたい」「下山のすてきをもっと知ってほしい」と考えるようになった(写真⑦)。そこで、児童Aは高木田さんや小久保さんに向けて感謝のメッセージカードづくりに取り組んだ。写真やメモを見返しながら、自分が最も伝えたいことを選び、相手に思いが伝わるように言葉の順番や表現を工夫していた。また、下山のよさをまとめた掲示物づくりでは、「みんなにも知ってほしい」と話し、写真やインタビュー内容を整理しながら、自らまとめる姿が見られた。さらに、「もっとたくさんの地域の『ひと』に会いたい」「自分たちが見つけた下山のすてきを広めたい」と自ら提案し、2学期の活動につながる新たな交流への意欲を示した(資料6)。これは、地域とのつながりを自分事として捉え、自ら地域と関わろうとする意識が高まった姿であると考えられる。



以上のことから、自分の思いや感謝の気持ちを具体的な行動として表現する場を設定したことで、児童Aは地域への愛着を深めるとともに、地域と主体的に関わろうとする態度を育むことができたと考えられる。

3 仮説の検証

(1) 仮説Ⅰの手だてについての検証

手だてa 下山につながる「ひと・もの・こと」に関わる体験活動の設定

児童Aは当初、人に話しかけることへの抵抗感が強く、自分から地域の人と関わろうとする姿はあまり見られなかった。しかし、田んぼ活動を出発点とし、前年度の養護教諭から地域の方へと段階的に交流相手を広げる体験活動を設定した。当初は「自分から話すことはできない」と話していた児童Aが、「小久保さんにもっと話を聞きたい」「2学期も地域の人に会いたい」と自ら交流を求める発言をするようになった。このことから、地域との関わりへの抵抗感が軽減され、当初は自分から質問する姿は見られなかったが、交流を重ねる中で、自ら質問内容を考えたり、関わりたい相手を提案したりする姿が見られるようになった。また、「次は蔵カフェー合に行きたい」「小久保さんに会ってもっと話を聞きたい」と、自ら関わりたい相手を提案する姿も見られるようになった。さらに、交流活動を通して、「こんなにたくさんの人が田んぼを手伝ってくれていたんだ」「だから毎年できるんだね」と発言しており、自分たちの学校生活や田んぼ活動が多くの人々に支えられていることに気づくことができた。

以上のことから、下山につながる「ひと・もの・こと」に直接関わる体験活動を設定したことは、児童Aの主体的な関わりを促すとともに、地域に支えられている自分に気づき、下山を身近に感じることにつながったため、手だてaは有効であったと考える。

手だてb 「ひと・もの・こと」のつながりが見える整理・共有の工夫

児童Aは、田んぼアンケートや地域の方との交流で得た情報を、付箋やフィッシュボーン図を用いて整理・共有したことで、「誰が」「どのような思いで」「何を支えているのか」という視点から地域とのつながりを捉えることができた。当初は、田んぼ活動を支える地域の方々の存在を漠然と認識しているだけであったが、情報を可視化しながら整理することで、多くの地域の方々がそれぞれの役割や願いをもちながら下山小学校や田んぼ活動を支えていることに気づくことができた。また、交流活動前にフィッシュボーン図を活用して質問したいことや知りたいことを整理したことで、活動の見通しをもって交流に臨むことができた。その結果、「次は蔵カフェー合に行きたい」「小久保さんにもっと話を聞きたい」といった発言が見られ、自ら地域との関わりを求める姿へと変容した。さらに、整理した情報を友達と共有する中で、自分では気付かなかった地域のよさや地域の方々の思いにも目を向けるようになり、自分たちの学校生活や田んぼ活動が多くの人々に支えられていることへの理解を深めることができた。

以上のことから、付箋やフィッシュボーン図を活用して「ひと・もの・こと」のつながりを可視化し、整理・共有する場を設定したことにより、児童Aが地域とのつながりを関連づけることにつながった。また、地域の方々に支えられている自分への気付きを促すとともに、地域とのつながりを構造的に捉え、自分が地域に支えられていることへの気付きを深める上で手だてbは有効であったと考える。

仮説Ⅰの手だてaと手だてbの有効性は検証することができた。

仮説Ⅱの手だてについての検証

手だてc 見つけた下山のすてきを伝え合い、思いを広げる交流活動の充実

伝え合いの活動では、児童Aは、体験活動で得た気付きや地域の方から聞いた話を写真やワークシートを用いて整理し、自分の言葉で友達に伝えた。「高木田さんが下山のことを大切にしていると思いました」「地域の人は、ぼくたち

(ほたる号のまとめ) A1 <u>みんなにも知ってほしいな。</u> B1 職員室に行ってみてもらおうよ。 A2 いいいえ。みんなで行って行って説明しようよ。	資料6 授業記録抜粋④
(下山のよさをまとめた掲示) A3 ぼくの知らなかったこともたくさんあるよ。 <u>もっとたくさんの「ひと」に会いたいな。次は、炭焼きも見に行きたいな。</u>	

のことを考えてくれているんだね」と、自分が感じたことを相手に分かりやすく伝えようとする姿が見られた。また、友達の発表を聞いて「ぼくが知らなかったすてきがいっぱいある」「2学期も地域の人に会ったり、場所に行ったりしたい」と発言し、自分にはなかった視点を取り入れながら地域のよさを捉え直していた。これらの姿から、交流活動は、自分の気付きを整理・発信するだけでなく、友達の考えに触れることで地域への見方や考え方を広げる機会となったと考える。また、「もっと地域の人と関わりたい」という発言は、地域との関わりを受け身で捉えるのではなく、自ら関わろうとする意識が高まったことを示している。

以上のことから、見つけた下山のすてきを伝え合う交流活動を設定したことは、地域への愛着を深めるとともに、地域の「ひと」と主体的に関わろうとする意識を高める上で有効であったと考える。一方で、その思いを継続的な行動へとつなげるためには、自分の考えを安心して表現できる交流の場を継続して設定し、主体的に発信する機会を積み重ねながら、さらに検証していく必要がある。

手だてd 地域との関わり方を考え、実践へつなげる活動の設定

体験活動や交流活動を通して得た気付きや地域の方への思いを基に、「自分たちにできること」を考える場を設定した。その結果、児童Aは「ありがとうを伝えたい」「下山のすてきをもっと知ってほしい」と考え、地域の方へのメッセージカードづくりや掲示物づくりに進んで取り組んだ。また、「みんなにも知ってほしい」「もっとたくさんの地域の『ひと』に会いたい」と自ら提案する姿も見られ、自分の学びを地域や学校へ広げようとする意識が表れていた。これらの姿は、地域の方への感謝を表現するだけでなく、自分たちの学びを発信し、地域とのつながりをさらに深めようとする主体的な行動へと変容したことを示している。また、自ら交流の機会や発信方法を考えようとする姿が見られたことから、地域との関わりを自分事として捉え始めたと考えられる。

以上のことから、自分たちにできる地域との関わり方を考え、実践へつなげる活動を設定したことは、地域への愛着を深めるだけでなく、地域の「ひと」と主体的に関わろうとする態度を育む上で有効であったと考える。一方で、主体的な思いを継続的な地域貢献へ発展させるためには、地域の方と協働して地域の課題解決や地域の魅力発信に取り組む学習活動を位置付け、その変容を継続して見取っていく必要がある。

仮説Ⅱの手だてcと手だてdはさらに検証をしていきたい。

4 成果と今後の課題

(1) 成果

本実践では、下山につながる「ひと・もの・こと」に関わる体験活動を段階的に設定し、地域とのつながりを可視化しながら整理・共有する活動や、見つけた下山のすてきを伝え合う活動を行った。その結果、児童Aは地域の人や場所、ものに対する関心を高め、自ら地域に関わろうとする姿へと変容していった。特に、当初は「自分から話すことはできない」「やりたくない」と話していた児童Aが、地域の方との交流を重ねる中で、「次は蔵カフェー合に行きたい」「小久保さんにもっと話を聞きたい」「2学期も地域の人に会いたい」と自ら関わりを求める発言をするようになった。このことから、児童Aにとって地域の方との交流が安心感や成功体験につながり、地域との関わりを前向きに捉えることができるようになったと考える。また、付箋やフィッシュボーン図を用いて「誰が」「何を」「どのような思いで」支えているのかを整理したことで、田んぼ活動や学校生活が多くの地域の方々によって支えられていることに気付くことができた。さらに、友達と気付きを共有する中で、自分では気付かなかった地域のよさや地域の方の願いにも目を向けることができ、下山をより身近な存在として捉えるようになった。そして、「ありがとうを伝えたい」「下山のよさをもっと知ってほしい」という思いをもち、感謝のメッセージカードや掲示物づくりに進んで取り組む姿が見られた。これは、地域を支えてくれている人々への愛着が育ち、地域とのつながりを自分事として捉え始めた姿であると考えられる。

以上のことから、下山につながる「ひと・もの・こと」と関わる学習は、児童が地域に支えられている自分に気付き、地域とのつながりを実感するとともに、その実感を基盤として地域の「ひと」と主体的に関わろうとする態度を育む上で有効であった。

(2) 今後の課題

本実践を通して、児童は地域とのつながりに気づき、自ら関わろうとする姿を見せるようになった。しかし、地域への愛着や主体的に関わろうとする意欲を一時的なものに終わらせず、長期的な視点で児童の変容を追っていく必要がある。そのためには、地域の方との交流を単発の体験で終わらせるのではなく、年間を通して繰り返し関わることのできる学習活動を設定し、自分たちの活動が地域にどのようにつながっているのかを実感できる機会を充実させていく必要がある。また、地域のよさを知るだけでなく、地域の課題や願いにも目を向け、「自分たちにできることは何か」を考え、実践へとつなげていく学習へ発展させていきたい。今後も、地域との協働的な学びを大切にしながら、児童一人一人がふるさと下山に誇りと愛着をもち、地域の一員として主体的に地域づくりに関わろうとする姿を育んでいきたい。